横書き書字指導の研究

広川　芳守

一、はじめに

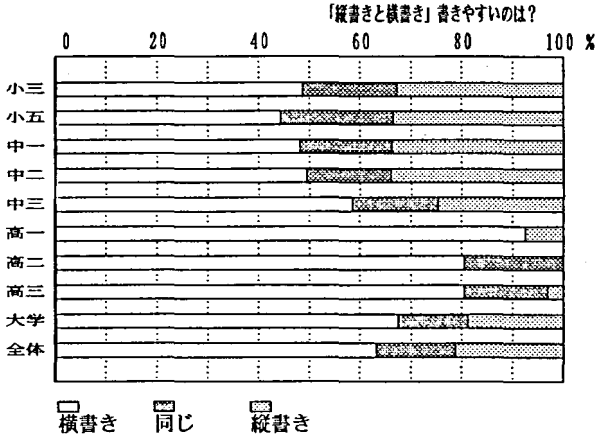
閑間昇氏の研究によると『ひらがなもカタカナも横書きの方が縦書きよりも連続性に無理がある場合が多く、そのために字形が乱れやすくなる。』ということがわかっている。その他、一字の中心・行の中心とも縦書きの方がとりやすいなど、根拠を挙げればきりがないくらい漢字も仮名も縦書きに適するようにできているというのは疑いのない事実である。

ところが、日本語の表記は縦書きに適しているのにもかかわらず、最近は公文書をはじめとして横書きの文章を頻繁に見かけるようになった。活字などで見るだけでなく、ノートや手紙など実際に書いたものを見ても横書きが増えているような気がする。そこで、子どもたちの横書きに関する実態、横書き指導の必要性の有無、もし必要性があるのならその方向などについて考えてみることにした。

二、横書きの実態

「縦書き・横書き、どちらが書きやすいですか?」という質問に対して、縦書き・横書き・どちらも同じの中から一つを選択してもらう形で、長野県内の小中高大生約千名を対象に調査を実施した。その結果が下のグラフ・表である。

全体の傾向としては「横書きの方が書きやすい」と答えた割合が中学二年ごろから増え始め、その後急激に増え、高校で頂点に達している。ただし、小学校では低い割合かというと、そうではない。小学校の段階で既に五割近くに達しているのである。「縦書きの方が書きやすい」との答えは三割強だから、小学校の段階で「縦書き」を「横書き」が上回っており、横書きの習慣が既に始まっていると考えられる。「横書きの方が書きやすい」割合は、中学では五割を超え、高校



では実に八割〜九割にもなる。「縦書きの方が書きやすい」割合は、逆に中学では二割〜三割、高校ではほとんどなくなってしまう。まとめると、横書きの習慣は、小学校中学年で既に始まっており、中学校時代に急激に浸透し、高校の段階では完全に定着しているということができる。

三、横書きの問題点

それでは、なぜこんなに横書きが定着しているのだろうか。横書きの利点として考えられるのは、書いたあとをこすらないですむ、書き終わった部分が見える、数式・ローマ字の書き方と一致するなどである。しかし、理由はどうであれ、縦書きに適しているものを無理に横書きしていることに変わりはない。故に、様々な問題が起こってきているだろうことは十分に予想できる。実態調査の結果、明らかになった問題点を次に挙げてみる。

(1)横書きをした場合、誰でも概形が正方形に近くなる傾向がある。

漢字の字形は、横画や左右の払いなどが強調され、長く飛び出すことがよくある。ところが、横書きの場合は横に文字を連ねていくので、横に飛び出す部分を短く抑えないと、隣の文字とぶつかってしまう。それを避けるために、横幅の変化をなるべくなくそうとする意識が働き、概形が正方形に近づく傾向がある。この傾向が高じていくと、「土」と「士」の区別がつきにくくなったり、いわゆる「丸文字」に近づくなど、文字の乱れの原因になる。

(2)横書きが書きやすい人の方が、概形が正方形に近い傾向がある。

問題の所在・内容は前出の(1)と同じであるが、横書きに慣れれば慣れるほど概形が正方形に近づき、問題傾向が強まると言える。

(3)罫線を傾けて書くことにより、縦画が傾く可能性がある。

右手で横線を引く場合、少し右上がりの方が書きやすい。しかし、横書きの場合、横画は水平に書く方が行も通りやすいし、次の文字へもつなげやすい。そこで、実際に書くときは少し右上がりに書いて、書き上がった文字の横画は罫線に平行になっている、ということを実現させるために、罫線を傾けた状態で書く。そうすると、縦画まで傾いてしまう。縦画が傾くということは、左右相称という書造形の大切な原理に合致しなくなり、全体の安定感もなくなってしまうのである。

(4)横書きにより、回転部分の退化が起こる。

特にひらがなにおいて、回転部分が最終画になっている場合、その終筆は最下部まで達しなければならないが、横書きをすると、次の文字はすぐ右側に書くわけだから、終筆部分を最下部までもっていくより途中で止めた方が次につなげやすい。こうして「あ」と書かねばならないのに「ぁ」になってしまう、いわゆる回転部分の退化が起こるのである。この字形は一見してすぐわかるとおり「丸文字」「マンガ文字」の字形そのものである。

(5)字間の幅を統一しにくい。

(1)でも述べたように、漢字は横画や左右の払いなどが横に飛び出すことがよくある。したがって、一本だけ強調されて長くなっている横画がある文字・左右の払いがある文字などは、予めそのことを計算に入れた上で書き始めなければならない。例えば「三」の場合は、一番下の画だけが長いので、その画を最初に書いてしまえば字間も取りやすいが、書き順はそうではない。一番上の画が第一画だから、その画を書く段階で一番長い第三画のことまで計算して書かなければならないのである。書き順も横書き用にはできていないという感じもするし、それが字間を統一しにくくさせている原因にもなっているような気もするが、とにかく、横書きの方が字間を統一しにくいのは確かなようである。その実態を調査してみた。

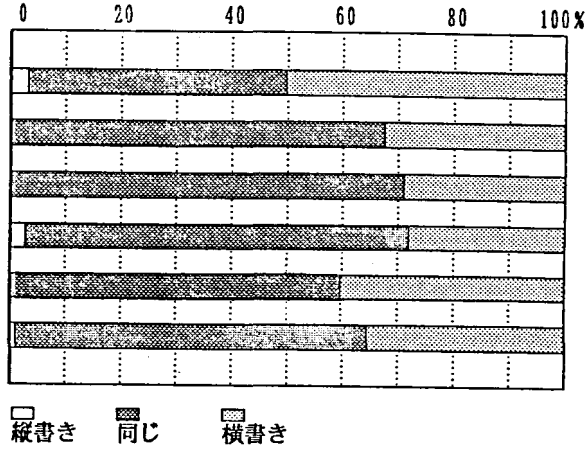
(平成五年六月、長野市内の小中学生約四百名を対象に実施)

その結果が下のグラフ・表である。

調査の仕方は、「三人が力を出し合う」という文を縦書き・横書き両方で書いてもらい、字間の取り方が明らかに横書きの方が不統一・明らかに縦書きの方が不統一・どちらもだいたい同じの三種類に分類し、割合を求めた。

結果は、横書きより縦書きの方が字間の取り方が不統一だったのは、全体でわずか1・2%。ほとんどいないと考えてよさそうである。それに対して、縦書きより横書きの方が字間の取り方が不統一だったのは、全体の三分の一以上。小学校三年生では、実に半数に達した。また、字間が広すぎたり、反対に狭すぎて隣の文字と重なってしまったりしたのは、

字間の取り方の悪いのは？



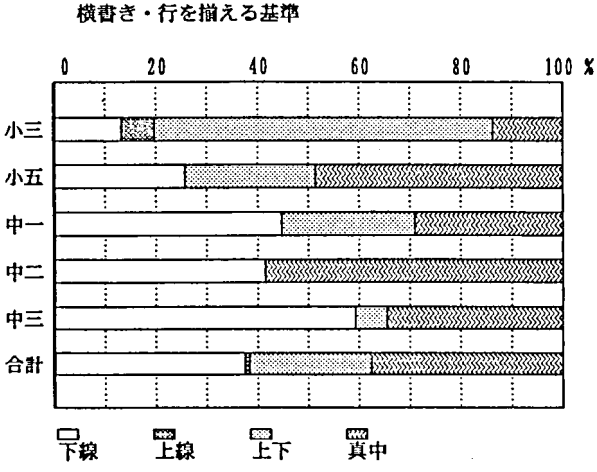
「三」「人」「合」の部分に集中しており、一本だけ強調されて長くなっている横画がある文字・左右の払いがある文字などは特に字間を統一しにくいのではないかという仮説が、実証された形となった。

(6)文字の中心が把握しにくい、行が通しにくい。

漢字・仮名は縦書きに適するようにできていることもあって、文字の縦の中心は比較的容易に把握することができる。

ところが、同じ文字でも横の中心となると、日頃意識して見たり書いたりしていないせいもあろうが、なかなかつかみにくい。例えば、「小」など縦画がちょうど縦の中心になっている場合、「頭」など偏と旁の真ん中に中心がある場合などは、縦の中心はすぐつかめる。では、「小」「頭」の横の中心はどこにあるかというと、これはなかなかわかりにくい。偏と旁からできている文字は縦の中心がその真ん中にあることと同じ原理で、冠や脚がある文字の場合は、その分かれ目が横の中心かというと、必ずしもそうだとは言えない。どう考えても、横の中心の方が把握しにくいのである。縦書きの場合、行が曲がらないように、それぞれの文字の縦の中心を通し、揃えていくのだが、同じやり方で横書きの行を揃えていくには、各文字の横の中心をどうしても把握しなければならないが、前述のとおり把握しにくい。したがって、行が通しにくく、曲がりやすいということになる。

一応結論を出したところで、下のグラフ・表をご覧いただきたい。これは、横書きの場合、児童生徒は罫線のどのあたりを基準にして行を通しているかを調べたものである。（調査時期、調査対象は前述(5)と同じ）グラフ・表の中の「下線」というのは、各文字の最下部を揃えることで、罫線がある場合は、下の罫線を基準にして、その上に各文字を乗せていくことによって行を通すやり方である。「上線」というのは、「下線」と逆で、上の罫線を基準にするやり方である。「上下」というのは、上下の罫線に接するようにスペースいっぱいに書くやり方である。「真中」は縦書きのときの縦の行の通し方と同じで、罫線に頼るのではなく、各文字の中心を揃えるやり方である。調査結果を見ると、「上線」は全学年を通してほとんどいない。そして、小学校低学年頃は「上下」いっぱいに書く割合が圧倒的に多いのに、学年が上がるにつれて減っていき、逆に「下線」「真中」が増えていく傾向が認められた。特に、「下線」は中学生の約半数を占めていることがわかった。縦書きの行の通し方と同じ考え方ならば、



「真中」が多数を占めるはずなのに、「下線」が多くなったのはなぜだろう。一番やりやすいのは「上下」である。どこに揃えるかなどと考える必要はなく、とにかくはみ出さないようにいっぱいに書けば自然に行も通るのであるから。小学校三年生に「上下」が多いのも、うなずける。しかし、「上下」いっぱいに書くと、罫線の幅によって文字の大きさが決まってしまったり、次の行との余白がないので雑然として見えるなどの欠点があることから、廃れていく。文字の大きさを自分で決定でき、次の行との余白が保てるということでは、残りの三つは同じであるが、「上線」では文字の下が空きすぎて、安定感がない。上下のバランスということでは「真中」を選択したいのだが、各文字の横の中心が取りにくい。そこで、ある程度安定感があり、文字の中心を考えなくてもよい「下線」が増えていったと考えられる。こう考えてくると、この調査からも、横書きの場合、文字の中心が把握しにくく、そのことが行を通しにくくしているということがわかる。

四、横書き指導の現状

それでは、今までに横書きの指導は行われてこなかったのだろうか。そのことを調べるために信州大学教育学部の学生六十五名に対して「今までに学校で横書きの指導を受けたことがありますか」という質問をしてみた。その結果、「ある」と答えたのは、わずかに6・2%しかいなかった。さらに、「ある」と答えた人に、指導を受けた内容について尋ねてみると、「小学校の習字の時間に、ただ手本を見て書いただけ」と答えた人がほとんどであった。つまり、指導らしい指導は、ほとんど行われていないと考えてよさそうである。

次に教材を見てみる。新学習指導要領になって、平成四年度に小学校・平成五年度に中学校の教科書が改訂になったが、教科書には横書き指導用の教材がどれくらい載せられているのだろうか。

	光村図書	学校図書	東京書籍	教育出版	日本書籍	大阪書籍
小1年	0 (30) 0,0	0 (30) 0,0	0 (30) 0,0	0,8 (30) 2,7	0 (29) 0,0	0 (30) 0,0
小2年	0 (30) 0,0	0 (30) 0,0	0 (30) 0,0	1 (30) 3,3	0 (29) 0,0	0 (30) 0,0
小3年	0 (14) 0,0	1 (13) 7,7	0,3 (14) 2,1	0,5 (14) 3,6	0 (19) 0,0	1 (8) 12,5
小4年	1 (15) 6,7	2 (13) 15,4	1 (13) 7,7	1 (15) 6,7	0 (18) 0,0	1 (10) 10,0
小5年	0,8 (11) 7,3	1 (11) 9,1	1 (11) 9,1	1 (13) 7,7	1 (14) 7,1	1 (8) 12,5
小6年	0,3 (10) 3,0	1 (11) 9,1	1,7 (12) 14,2	1,5 (12) 12,5	0 (14) 0,0	1 (8) 12,5
中1年	2,5 (14) 17,8					
中2年3年	3,5 (19) 18,4					

凡例
1 ┌横書き教材のページ数
(11) ┄硬筆教材の全ページ数
9,1 └横書き教材の割合（%）

右の表が調査した結果である。結果を見て、横書き教材の少なさに、誰もが気づくであろう。小学校低学年では、ほとんど0に近く、中学年で数%、高学年でも一割には満たない。中学校になると多少増えるが、それでも二割には満たない。教材自体がこれだけ少ないことに加え、教科書の指導書にあ

る指導内容も、かなり貧弱である。行の真ん中か下に書くとか、書き出しを揃えるとか、漢字と仮名のバランスに気をつける、横書きになると読点がカンマになるなど項目を挙げてあるだけである。例えば、指導項目として「文字の中心を罫の中心に合わせて書く」ことが挙げられているが、今までの書写教育の中で文字の横の中心を意識させたり、つかませたりする指導は行われてきてはいない。もちろん今回の教科書にもそういう指導内容は一切ない。各文字の中心のつかみ方を指導せずに、「文字の中心を罫の中心に合わせて書け」と言っても指導したことにはならないのである。

五、これからの横書き指導の方向

とにもかくにも、まず横書き指導の必要性・重要性を理解した上で実施しなければ話しにならない。横書きによる字形の変化（概形が正方形に近づく・罫線を傾けて書くなど）や横書きの方が書きやすい人の増加が、小学校高学年に端を発し、中学生ではかなり顕著になることが、明らかになっているのだから、遅くとも小学校高学年では始めていくべきである。指導内容は、前述した「横書きをすることによって生ずる問題点」を理解させることから始めたい。理解といっても、単なる知識として与えるのではなく、感動や驚きなど心の動きを伴った深い理解をさせる必要がある。なぜなら、単なる知識として伝達しただけでは、それが日常の書字・観字活動に生きて働くとは考えにくいからである。「横書きは書きやすい」と考えている児童生徒に「横書きは結構難しく、注意して書いたり見たりしなくてはならない」と意識変革をもたらすような指導内容にしなくてはならない。

そこで、次に前述の「横書きの問題点」の中から横書き指導でぜひ理解させなければならないと思われる項目を挙げてみる。

— 縦書きより横書きの方が —

(1)横幅が抑えられ、概形が正方形に近くなる傾向がある。
(2)縦画が斜めになる危険性がある。
(3)字間が不統一になりやすい。
(4)行が曲がりやすい。

六、実践的研究

実践的研究を行うにあたって、まず、何を研究し、どんな点を明らかにしたいのかをはっきりさせなくてはならない。そこで、今までの研究で、はっきりしてきたことの中から、次の二点を仮説として取り上げることにした。

(1)前節の最後に挙げた四項目の横書きの指導を行うことが、字形そのものや字形感覚の乱れを防ぎ、書写の能力を生活に役立てる態度を育てることにつながる。

週一時間の書写指導で理想の姿にまでもっていくのは大変難しい。だからこそ、書写の授業で培われた知識・技能・態度は、日常の書字・観字活動に取り込まれるものでなくてはならないし、逆に取り込まれることによって知識・技能・態度の定着を図ることが期待できるようでなければいけない。こう考えたとき、現在の日常生活の中で主流になっている「

横書き」に本腰を入れて取り組まないのはおかしいと言わざるを得ない。現在、ほとんどの書写の教科書は「いろいろな書式」という単元で配列の注意事項などを掲げ、横書きに慣れさせる程度の扱いしかしていないが、前節で取り上げた四項目の横書きの指導を行うことが字形そのものや字形感覚の乱れを防ぎ、書写の能力を生活に役立てる態度を育てることにつながると考える。

(2) 文字を正しく整えて書くためには、字形指導と文字の配列・配置の仕方を関連づけて指導すべきである。

現在、字形指導の単元と文字の配列・配置の単元は全く別の独立した単元として扱われている。しかし、前に述べたとおり特に横書きの場合は、配列・配置の仕方によって字形が大きく変わる可能性がある。したがって、文字を正しく整えて書くためには、字形指導と文字の配列・配置の仕方を関連づけて指導すべきだと考える。

《実証授業後の生徒の反応と考察》

「横書き」単元の展開の大要と本時案は、本文末に資料として掲載してあるので、そちらを参照。

まず、実証授業後の感想として生徒が書いたものの中からいくつかを紹介する。（傍線引用者）

・横書きの方が書きやすいと思っていたけれど、今日やってみて間隔もばらばらで中心も通っていなかったのでびっくりしました。

・普段からきれいな字になるように心がけたいと思いました。

・ふだん気づかなかったことを学んだ。横書きの方が楽だと思っていたのに、難しいと感じた。勉強になりました。

・ぼくは字を書くとき、何にも考えないで書いていたのだけれど、今日先生やみんなの意見などで、いろいろ考えればうまくいくのだと思った。

・自分で横書きの方が間隔がばらばらに書いてあったことがよく分かりました。あと大きさもばらばらだったことに気づきました。

生徒の反応は「びっくりしました」「今まで気づかなかったことに初めて気づきました」など、ある種の驚きや感動を伴っているものが非常に多かった。知識の詰め込みによる形だけの理解ではなく、「なるほど」という実感のある本当の意味での理解に近づけた生徒がたくさんいたということになろう。先に書写の授業で培われた知識・技能・態度は、日常の書字・観字活動に取り込まれるものでなくてはならないし、逆に取り込まれることによって知識・技能・態度の定着を図ることが期待できるようでなければいけないと述べたが、そうなるためには実感のある本当の意味での理解が必要不可欠であることを考えれば、今回の授業は書写の能力を生活に役立てる態度を育てることにつながると考えてよさそうである。

では、なぜ生徒はある種の驚きや感動を感じたのであろうか。まず考えられるのは、初めての体験であったためにすべてが新鮮に感じられたこと。二つ目は自分の実態を見つめることから出発したことにより、他人事ではない自分の問題として受け取られたこと。三つ目は日頃何も意識せず書いてい

る横書き（または、縦書きより簡単だと思っていた横書き）が、実は難しいものだとの意識変革が生じる学習内容であったことなどである。「日頃何気なくやっている横書きは、実は難しい要素をたくさん含んでおり、自分も問題点をたくさん抱えている。」ということの理解は、ややもすると「こんなだったら横書きなどうまく書けるはずがない。」というあきらめにつながってしまう危険性があるが、今回の生徒の感想を見ると「普段から気をつけてきれいな字になるように心がけたい」とか「いろいろな観点に気をつければうまくいく」との内容のものがかなりあり、心配なさそうであった。

一応、今回の指導の方向でよさそうだという結論に達したのだが、さらに考えていかねばならないことが全くないかというとそうではない。残された問題点を次に掲げてみる。

①今回は「横書き」の単元を設定し、集中的に取り組んで、ある程度の成果があったが、指導内容が定着するには日常的な指導も含めてさらに継続して指導していかねばならない。その指導の時間をいかに確保し、指導内容をどう工夫していくか考えていかねばならない。

②この単元が終了してから一ヵ月経過した時点で調査したところ、横書きをする際の注意点を覚えていた生徒は全体の約七割。他の指導項目に比べるとかなり高い数字だとは思うが、三割の生徒は忘れてしまっているのである。この事実をどうとらえたらよいのだろうか。

③「学習した内容を日常に活かす」といっても、一番機会の多いノートをとる時は急いで書く場合が多く、しかも人に見せることを前提として書いていないので、「整えて・美しく」という意識が薄い。いかに横書きの注意点を意識させじっくりと書ける場を設定できるかが課題である。（教師が計画的に設定するばかりでなく、生徒自らが意識的に設定することも含めて）

④既に生徒の中に「書きやすくて見やすければ文字形は活字のような正方形に納まる形でよいし、縦画は斜めになって全体が斜体のようになってもよい」という感覚が存在しているが、それがさらに高じて、常識になってしまったとき、今回の横書き形式と字形の関係の指導がしにくくなってしまう。

最後に仮説(1)(2)についてであるが、たとえ④のような問題点があろうと、いや④のような問題点が今後心配されればされるほど、字形に対する感覚は鈍くなっていくであろうから、字形感覚を養うためにも書式と字形の関係や自分の実態を知る学習が欠かせなくなってくる。また、①～③のような問題点が残り、日常に活かすという点で今後さらに考えていかなければいけないことはたくさんあるが、とりあえず現時点では「驚きや感動を伴う理解」が日常に活かそうとする意欲の基盤になるとの考えから、この点においてもある程度有効であったと判断している。以上のような理由から仮説(1)(2)ともある程度の検証ができ、成立するであろうとの結論に達した。

（ひろかわ　よしもり　長野市立東部中学校教諭）

単元展開の大要

時	学習内容	指導・つけたい力
1	《本時》	本時案参照
1	1、横書きの問題点③「行が通しにくい」について ・罫線がある場合、自分はどこに揃えて書くだろう ・どこに揃える場合が行が通しにくいのだろう ・それはなぜだろう →文字は縦の中心の方が取りやすくできている 2、横書きの書式の整え方	・体験を通して自己を見つめさせる ・一つ一つの文字の中心の集合が行の中心になることを理解させる ・文字の縦の中心より横の中心の方が取りにくいことを、体験を通して理解させる ・文字は縦書きに適していることを理解させる ・書式の整え方の留意事項を理解させる
1	3、横書きの問題点④「縦画の傾き」について ・縦画が傾く傾向があるのはなぜだろう ・実際に罫線を極端に傾けて書いてみる ・なぜ罫線を傾けた方が書きやすいのだろう 4、文字は縦書きに適するようにできている	・実際に縦画が傾くことを体験させてみる ・罫線を傾けて書く傾向について実態調査の結果を発表する→3°～6°傾けて書く人がかなりいる →・右手で横画を引く時は少々右上がりの方が書きやすく、しかも横のつながりを保つため ・罫線を極端に傾けないことの確認
1	5、横書きによる文字の回転部分の退化の可能性について ・ひらがなの「あ、め、の」など回転部分のある字を速書してみる ・「丸文字」「マンガ文字」と呼ばれる文字と比較してみる 6、まとめ ・文字は本来縦書きに適するようにできている。それを無理に横書きしているのだから様々な問題が起こり得ることと、横書きする場合の留意点を確認する	・回転部分のある文字の速書を横書き形式でやらせ、回転部分が退化することを体験させる ・「丸文字」「マンガ文字」の発生は、横書きと関係がありそうだとの理解 ・横書きの難しさ ・縦書きに適した字形 ・横書きの場合の留意点 を感得させる

本時案

(1)単元名　「横書き」

(2)本時の位置　　4時間扱いの第1時

【前時】漢字・仮名の点画・筆使い・形の取り方の学習のまとめとして「古代社会と三大文明」を清書した。

【次時】横書きの第二の問題点「行の中心が通しにくい」について、その原因を考えながら横書きの書式の整え方を学習する。

(3)本時の目標

横書きの方が書きやすいと感じている生徒たちが、横書き縦書きの相違点やその原因を考えることを通して、横書きの難しさに気づき、文字を注意深く見つめようとする意識が持てる。

(4)実証の観点

①教材文字に横幅の変化が大きい文字を選定したり、概形枠で切り抜いた文字を並べさせたことが、文字を横に配列することは難しいという事実に気づくことにつながったか。

②横書きと縦書きの相違点やその原因、さらに横書きの注意点など、理解面を中心に授業を組み立てたことは、授業に対する意欲関心面・日常に活かそうとする態度面に有効に働いたか。

③上記①②のような教材・指導課程の工夫をしたことで、今まで気づかずにいた自分の実態を知った驚きの姿や、自分のものの見方が変わった喜びの姿が見られたか。

記号	意味
▭	学習活動の開始、および終了
⏢	学習者が自分自身で行う学習活動
⏢	教師と学習者が交互に関与しながら学習していく活動
◇	評価（判断）
□	説明・補足
⬚	板書

(5)展開

ねらい	時	学習指導の流れ	指導助言・教材・資料など
1、縦書きと横書きの相違点（横書きの問題点）に気づくことができる	10分	始め 気づいた相違点を発表しあう 新たな相違点に気づけたか NO：出された相違点を整理・確認し、もう一度自己訂正させる YES：相違点①②に注意しながらもう一度書く（硬筆）	◆教材文字「古代社会と三大文明」 ◆教材文字を縦書き、横書きした用紙（各1枚） ◆気づいた相違点を記入した学習カード 【気づかせたい相違点】 ①横書きの方が字間が不統一である ②　〃　払いや横画が短い ③　〃　中心が通っていない （④　〃　縦画が垂直でない） ・④については生徒の方から出された場合のみ扱う ・出された相違点のうち、本時では字形が原因となっている①②についてのみ扱う
2、相違点①②の起こる原因を理解できる	10分	なぜ相違点①②のようなことが起こるのか話し合う （グループ→全体）	・相違点①②の起こる原因を話し合う事を予告して書かせる 【気づかせたい原因】 ①楕形の横の変化は縦の変化より著しく大きい（横に大きく広び出す字形の文字が多い） ②書き出しの位置を決めるときにすぐ前にある字との間隔を予測しにくい ③厄の文字とぶつかることを避けようとするあまり長いや横画が短くなってしまう

		縦形枠で切り抜いた各文字を縦、横に並べさせる ← NO ← 原因が理解できたか → YES 原因③について、短く抑えることの危険性を説明する	・②が出ない場合は「文」「三」を例に筆順との関係も合わせて説明する、③が出ない場合は①②と起点②から導きだす方向で指導する ◆縦形枠で切り抜いた各文字 ・生徒から出そうな場合は出させる ・これらの原因は縦書きの場合には当てはまらず、したがって横書きの方が難しいことを確認する
3、学習の手順・方法を理解し、実行できる	20分	練習する際の注意点を話し合う（全体） どんな練習用紙を使えばよいかを話し合う（グループ） 机間巡視の際の教師による個別的な助言 ← NO ← 注意点の理解と練習用紙の工夫ができたか → YES 工夫した練習用紙で練習し、相互評価する（硬筆） 書き出しの位置を示さない用紙に一枚書く（硬筆）	・原因①～③を踏まえた上で「字間を統一する」「払いや横画を短く抑えない」ようにするためには次の点に注意する必要がある 横に大きく飛び出す部分のことを考慮に入れながら書き出しの位置を決定しなければならない ・生徒は「重ね写し」「薄書き」「骨書き」「始筆（終筆）点に印を付ける」などの練習用紙の工夫の仕方を心得ているが、今回は注意点の「書き出しの位置」に注目させて「始筆（終筆）点に印を付ける」方法でまとまるように導いていく ◆「古代社会と三大文明」の硬筆用横書き手本 ◆練習用紙 ・練習用紙を自分で作成し、お互いに見合いながら数枚練習するように指示する ・消しゴムを使わせないで清書として1枚だけ書かせる
4、自己を見つめ、学習内容の定着を図ることができる	10分	書いたものを自己評価する 教師による個別的な助言 ← NO ← 観点について適切な自己評価ができたか → YES 学習のまとめと反省をする 終わり	・赤ペンで作品に直接書き込む形で自己評価させる （評価の観点） ・字間がそろっているか ・払いや横画が短くなっていないか ・特に「会大文」の払いや「三」の第三画の反さ、これらの文字の前後の余白に注目するよう机間巡視の際に助言する ・評価の観点以外の字形、点画、筆質などについては今回は評価させない ◆反省記入用紙 ・今日の授業でわかったこと、うまくいかなかったこと、これからの生活に活かしたいことなどを中心に書かせる ・時間があれば「横書きは難しいものだということがわかった」「書き出しの位置に気をつければよいことがわかった」「これからノートをとるときに活かしたい」「もっと横書きのことを勉強してうまく書けるようになりたい」等を中心に発表させる